九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「碓氷の坂を越えしだに」補説 : 父の思い出によせて

春日, 和男

https://doi.org/10.15017/12291

出版情報：語文研究. 16, pp.51-68, 1963-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「碓氷の坂を越えしだに」補説

――父の思い出によせて――

春日和男

一

国語学や国文学を究める者として、書を愛しそれに親しむことは当然の話ながら、その方面では父も骨董趣味などと共にちょっとした道楽者であったかもしれない。それは遠く奈良在住の頃から始まって、晩年までほそぼそと続いたといえよう。そして彼がわたくしに遺したささやかな置き土産といえば、その五十余年のあいだ集めた書物にあるといっても過言ではない。またわたくしがこうして父と同じ学問に迷い込んだということも、一つにはその書物がもたらした機縁であったともいえそうである。

もちろん、わたくしがその少年時代から家蔵本に価値を見いだしたり、特に親んだというわけではなく、また父自からもその様なことについてとやかくいったことはなかった。むしろわたくしは、そのような点について、お世話になった諸先生や知己の方々の言葉を介して、外部から間接的に知識を持ったといった方が適当かもしれない。然し、大学に入り、たまたま必要に迫られて、京都の宿舎からこういう本は家にないかなどと問い合わせると、父は大概その要求に叶うだけの家蔵本を送ってくれた。しかも、それが時には二三種類の多きにわたっていて、思わぬ重宝をしたこともあったが、そんな場合一つ一つによく付箋などが入れてあって、その本の価値にも及び、こういう本は京都にも余りないから紛失などしないようにという注意書きまでしてあることもあった。

然し、送られた本は多く和書であったから、索引のついた当今の活版本に比べると、どうしても読みづらく、また取扱いに不便でもあり、迂遠な感じさえして最初はかなり取りつきにくいものであった。それで活版本は無いのかなどと愚かな問い合わせをすると、生憎そういうものは家にはない、これで辛抱せよ、活版本は研究室のもので間に会うではないかというような返事があった。仕方がないので我慢をしながら勉強したが、然しこれがわたくしにのちのちまで大変な薬になったことをつくづくと感じる。

ともかく父の蒐集は和本を主体とし、とりわけ古本を愛した。教壇でもその通りで、聴講者には新しい活版本のテキストを持たせても、自分では古版本などに朱注を入れたものを多く用いていた。父が夜遅くまで源氏物語などの下調べをして、一種の節をつけな

がら青表紙本を読み上げる声を、隣室で夢うつつの中に聴いていた幼い思い出も懐しい。

福岡へ移ってから、古本の良いものが見当らないことをかこち、「京の昼寝にも劣る田舎の学問」[1]などともこぼしてはいるが、それはそれなりに思わぬ掘り出し物もないわけではなかったようだ。戦前の福岡の橋口町は旅館と古本店の町並みであったが、懇意であったそこのK書店やM書店などには、わたくしもしばしば父のお伴をして立ち寄り、店の主人からお茶のご馳走になったりした。種麿[2]言道、望東、益軒、など土地の学者の書画や、方言の資料などもその頃に集めたようである。晩年は吉利支丹関係に蒐集が移り、聖書の古い和訳本[3]や各国語訳、伊曽保、天路歴程、公教要理等の古本の類は、その方面の骨董と共に、相当の数にのぼって、この分では基督教に改宗するのではないかと傍の者が変に気をもむ程であった。然しそれは、どこまでも言語研究の資料蒐集としてはじめたもので、信仰とは別であった。

わたくしとの古本屋廻りは、必ずしも福岡だけではなかった。晩年上京の機会が多くなり、わたくしも学会その他の用件を見つけてはよく同道したが、一つには旅次の雑用に任じたり、また保安の役目も兼ねていた。東京での予定の用件が終り、汽車の発車まで時間のあるときには、よく神田をひやかそうとわたくしを誘った。都電を神保町で捨てて、まずI書店あたりから始まって、九段の方へ古書店を軒並みに漁ってゆくのである。といって別に買おうというのではない。反対にわたくしが何か買いたいそぶりでもしようものなら、妙なものは買うなよというようなことさえもいった。それでいて結構楽しそうで、ご機嫌はよかった。九段坂の近くのS書店あたりから同う側へ移り、こんどは反対にG書店の方へ更に一軒一軒棚を見てゆく。中には父の顔を覚えていて、「九州は台風があったそうで」などと挨拶する店主も四五人はいるのであった。再び神保町の交叉点へもどって来て、やれやれこれで終ったかと思っていると、今度は三崎町の方へ曲がって行くではないか。これではお伴の方が足腰が痛くなっていささかへこたれ気味になってしまう。そんな精力的な古本屋廻りも、N書房あたりで主人と二三ことばを交わしてやっと終りになり、水道橋から国電に乗って東京駅へ駆けつけるというような具合いであった。

古本の蒐集ということは必ずしも読書を意味するものではなく、事実父もそう多読、速読の方ではなかったので、買入れた本がそのまま積んでおかれる場合も少くなくて、特に戦争の期間を経て、蠹の住家となってしまったものも多い。またその中には骨董的価値においてとりあつかわれるものもあったが、とにかく奇蹟的に戦災を免かれて、家と本とがそっくりそのまゝ残ったということは幸福なことであったし、わたくしをして復員後再度志を変えることなく、この方面の学問に向わせる一つの動機にもなった。

父の病がいよいよ改まった時、何とかして平静な環境の中に、その本に囲まれて終を全うさせたいというのがわたくし共家族の念願であったが、幸いに入院しないでもよいと医師からいわれた時は、当人もわたくし共もほっとした。そして最期の四五日前まで庭の草木を愛し、書斉で読み書きに余念がなかったということも、まずもって父らしい終り方であったというべきであろう。

註

（1）古訓漫談（文学研究2、国語叢考六四P）

（2）青柳種信の事ども（能古、昭和五年一月青靄集所収）等。

小学方言講義より（文学研究4）

源氏物語の俗訳本（文芸と思想十八号）

（3）一八五〇年和訳の馬太伝（文学研究36）聖書和訳の一資料

（西南学院編集1）

二

冗漫な前置きとなってしまったが、ここで父の集めた書物からわたくしが少しばかり恩恵を受けたことを述べて見よう。

標題の「碓氷の坂を越えしだに」とは万葉集巻二十・四四〇七番の天平勝宝七歳乙未二月相替遣筑紫諸国防人等歌の中で他（池）田部子磐前といふ者の作であるという。

比奈久母理宇須比乃佐加乎古延志太爾伊毛賀古比之久和須良延奴可母

とあるものの第二第三句に当たる個所である。ここの解釈については、去る昭和三十年雑誌「万葉」第十七号（解釈特輯号）に拙論を述べたことがある。いまその要旨を左に掲げる。

このところの解釈は、従来ダニを副助詞と見て「越えただけであるのに」という意味にとっている。これは旧註も現代語訳の場合も皆同じであって「越えし」のシは過去の助動詞キの連体形であって、それに副助詞ダニが接続した形と見ている。然しこの接続形態が上代に存したかどうかということには多少疑問があるのであってその理由を挙げれば次のようになる。

1. 上代の副助詞ダニ・スラ・サへは体言を直接に承けた例が一番多い。

一つ一つの例については、ここでは省略するが、

加久太爾母宣賜爾波伊布加志美意保々志念牟加（孝謙天平勝宝九年三月二十五日宣命――正倉院文書）

はカクという副詞についた例である。然し加久能状聞食（二七詔）や

山吹の花の盛りに可久乃其等きみを見まくは千歳にもがも（二十・四三〇四）

に見えるカクノおよびカクノゴトの様に格助詞ノをとりうるということは、早く体言と等価値のものとなっていたと考えてよい。

2. 上代の副助詞ダニ・スラ・サへは接続助詞テを介して体言に接続した例が多い。

これも一つ一つの用例は省略するが、接続助詞テについた形は特色があるから少し述べて見よう。

吾が背児が見らむ佐保道の青柳を手折而谷裳（タヲリテダニモ）見むよしもがも（八・一四三二）

たな霧らひ雪も降らぬか梅の花開かぬが代に曽倍而谷将見（ソヘテダニミム）（八・一六四二）

いずれも、動詞の連用形に接続助詞テがついて、さらにそれがダニに連なる形であることはいうまでもない。この様な接続形態はスラの場合にも起こり得た。

夢のみに見尚幾許（ミテスラココダ）恋ふる吾は寤に見てはま

していかにあらむ（十一・二五五三）

しかし、このミステラは「見尚」という字面の上からは新考のごとくミルスラとも訓め、現に古典文学大系万葉集㈢では

見るすら――見るだけでも。スラは接助詞ヲ・ニを承けるものもあるが、大部分は直接に名詞をうけている。従って、用言ならば連体形をうけるものと認め、見ルスラと訓む（一九八P）

とある。このような考え方では、連体形をダニ・スラ・サヘにつけるということも或いは可能であるかもしれない。されば、古典文学大系では、「碓氷の坂を越えしだに」を通説のごとく

越えしだに――ダニはダケデの意。

と頭注を付しておられるのである。

ところで沢瀉久孝博士の注釈によれば、「見尚幾許」の個所について、上記古典文学大系の頭注を引いて、次の様に述べてある。

「だに」もニ・ヲと直接名詞を受ける場合が多いが、「手折而谷裳」（八・一四三二）の如き例もあるのだから、「すら」も「見て」を受けたものがあったと見てよい。むしろ「見」一字に対して、「て」を訓み添へるより、ミルと見た方が合理的だと考へられたからだと見た方がよいかとも思ふが、ここは観念的な見る事ではなくて、見た事実と見る方が適切なのであるから、次の「対面者（みては）」と共にミテスラといふ旧訓によるべきだと考へる。

これは、活用言の連体形に副助詞ダニ・スラ・サヘを接続させる説に対してやゝ消極的ではあるが、結果的にはそれを否定しておられることになる。

かくしていよいよ副助詞ダニ・スラ・サヘの連体形に接続した例は他にないことになるのであって「碓氷の坂を越えしだに」のダニのみが通説によれば、連体形、それも過去の助動詞キの連体形承接の例として残るわけである。しかもそれが素朴な防人歌の中にのみ存在するということに一層の不自然な感じを覆うことができない。

最後にこの歌には、

比能具礼爾（日の暮れに）碓氷の山を古由流日波（越ゆる日は）背なのが袖もさやに振らしつ（十四・三四〇二）

という類似の東歌があって、子盤前の妻の作とまで付会されたものであるが、「越えしだに」と「越ゆる日」との関係、「ひなくもり」と「ひのくれに」との枕詞的修辞の対応等を考慮に入れた場合、ダニを副助詞と認めることにやゝ無理を感じるのはわたくしばかりではあるまいと思う。

註

（1）以下に述べることの概略は昭和三十五年十一月熊本における西日本国語国文学会において「中島広足の国語学」と題して講演した拙論の中に触れた。

三

さて、わたくしは「碓氷の坂を越えしだに」を右に述べたような諸理由、殊に類歌との関係において「碓氷の坂を越え時（シダ）に」

の意味にとって見た。[1] 幸い時の意味をあらわすシダという一種の形式名詞は、東歌に多く見られる所であるし、こう見れば、既述のダニの接続の問題も起らず、歌意も極めて平明になってくるからである。即ち

（ひなくもり）碓氷の坂を薄曇りのうちに越える時に、私は家の妻が恋いしくて忘れられない。

として見たのである。

それでは、この解釈の由来は何によるのであるか、それは既述したように、大日本国語辞典（大正四年—同八年）および大言海（昭和八年—同十二年）における「しだ（時）」の項を見るに及んで、その所に「碓氷の坂を越えしだに」の引用に接したからであった。即ちわたくしは辞書の説に啓発されて、この様な解釈を試みたのであった。ところが、そのような辞書の説が余りに孤立的であって、その淵源をどこに持っていってよいのかが問題となって残されていたのである。

そこで、現代語訳において右の辞書に引くような説と合致する解釈がありはせぬかともう一度調査してみたのであるが、これも既に折口信夫博士が口訳万葉集の中で示しておられることを知って、不明を恥じたのである。念の為、「口訳」に示された解を引用すれば左の通りである。

日な曇碓氷ノ坂を越え時に、妹が恋しく恋らえぬかも

右一首　池田部ノ子磐前

二月二十三日、下野ノ国ノ防人部領使大目正六位下上ツ毛野ノ君駿河の進った歌十二首の中、但拙劣な歌は捨てた。（以上上段）

（茲を通れば、愈故郷が見えなくなる。）碓氷の峠を越える際にいとしい人が恋しくなって、忘れようにも忘れかねてゐることだ。（以上下段）（傍線は筆者補入）

とある。ここで問題がまたおこる。その一は、「口訳」の解釈はいかにも無雑作に述べられているが、果して折口博士の創案になるものかどうか。また前記諸辞書の説との関係はどうか。ということであり、その二は、何故にこの解釈が後の口語訳による諸注釈書の間に問題とならなかったかということであった。思うに口訳万葉集は大正五年の刊行であり、前記二辞書はいずれもそれよりも後の刊行である。但し大言海の前身「言海」は明治三十一年の刊行で、口訳よりは早く、しかも「しだ（時）」の項に「碓氷の坂を越えしだに」の用例が挙っているから「口訳」より以前にこの説が辞書上にのぼっていることになるのである。

ところが、この解釈の系統がはからずも、父の蔵書を見るに及んでおぼろげながら明らかになった。それは架蔵の「長崎、青木永章校合、中島広足書入本万葉集」を見ることにおいて、そのシダ（時）説が広足からでているということを知ったからである。これは寛永版本への書き入れであって、第一、二、十一、十二、の四巻を欠く十六巻の零本であるが、その奥書は各巻末につけられてある。ここでは二十巻の最後につけられたものを一往掲げると次のようである。

右万葉集二十巻以景山屈先生家蔵本校正之。至如冠註旁註亦皆拠

其本已。此本也先生所自校正蓋以契冲先師代匠記為拠。如其称師云則今井似閑翁之説也。翁亦契冲門人也。先生与似閑之門人樋口老人宗武友善。是故先生以其本校正訓点冠註之。則実契冲伝説之義不待代匠記而明焉者也。故予深崇信之以余力写之蔵巾箱笥為秘珍矣。後之閲者勿忽諸爾。

宝暦七年丁丑五月九卒業于平安室坊寓居

神風伊勢意須比飯高舜庵本居宣長謹

右万葉集二十巻諸説以本居先生校正本写之

従寛政三年辛亥十月廿八日濺筆于勢州松坂寓居迨同年十有二月念八日卒業　　帆足下総清原惟香

右以帆足惟香携来之写本校之了

寛政七年九月八日卒業　　長瀬　真幸

寛政六年二月廿六日朝江門以橘千蔭翁校本之訖如称元暦本者伊勢松坂冨山氏所蔵元暦元年所校之古本而千蔭翁嘗以彼本所校合也。

今乞右校本同校之畢　　長背　真幸

文化十五年四月廿七日以右校本校之畢　　中島　春臣

文政十二年九月十七日以暑解校合畢　　広　足

とあって、寛政六年二月廿六日の長背真幸の識語と文政十二年九月十七日の広足の識語は朱書である。青木永章は長崎諏訪神社の大宮司であり、真幸と共に中島広足と親交のあった長崎の国学者グループで、現に巻三、巻七、巻十、巻十三、巻十四には広足の後に朱で校合の識語を入れてある。また同じ仲間の船曳大滋も巻十六に天保十年の識語を入れている。以上のことから、この校合本万葉集は、最初本居宣長の校訂書き入れ本に始り、帆足惟香、長瀬真幸等の門弟の手を経て、中島広足に伝わり、それぞれ長崎における国学者の校合が入ったものになったなったこととなる(2)であろう。なおこの書写の順序については、今後更に解明すべき問題も二三残されている。ともかくここで広足の書き入れ及び自説の開陳が見られることは、万葉集広足説を摘出する上に非常に好都合である。

ところで問題の歌は第二十巻三十六丁表にあり、上欄に朱筆で、「巻十四ひのくれにうすひの山ともつゝけたり。速子碓日坂和名上野碓氷郡」と記した後

春臣按古延志太爾ノ志太ハ時ト云意ニテコエシ時ニ也。西国ノ方言ニ今モ云事ニテ吾肥後の俗ニイキシナカヘリシナト云此シナモ時ト同シク行時帰時ノ意ナリ。十四ノ二十二丁トホシトフコナノシラネニアホ思太モアハノヘ思太モナニコソサレ此思太モ同シ又サマト云言ニモアタレリコエシダコエサマ也。

とあって、「越え時（しだ）」の源泉がここにあることを知るのである。恐らくこれは文政十二年（年三十八）の略解校合の際の書き入れと見るべきものであろうから、名前も春臣から広足への過渡期にあたる。この頃しばしば長崎熊本江戸を往来して活動していた。

そこで次の問題は何故にこの説が辞書の中に取り入れられて後世に伝わったかということである。また口訳万葉との関係はどうかということも問題になる。然しこれは比較的明快な答がでるのである。つまり後世明治以後の辞書編纂に大きな便益をもたらした石川稚望の雅言集覧に思いをいたすとき、その増補が広足によってなさ

れたということである。今明治三十年刊の増補雅言集覧の「しだ」の項を引いてみると、

「志た」の次に「補（志だ）」とあって、

（万）廿ノ卅六「ひなぐもりうすひのさかをこえ志太爾いもがこひしくわすらえぬかも

（同）十四ノ廿二「とほしとふこなのしらねにあほ思太もあはのへ思太もなにこそよされ

（同）廿ノ廿六「あがもてのわすれも之太波つくばねをふりさけ見つゝいもはしぬばね

（同）十四ノ卅「人の子のかなしけ之太ははますどりあなゆむこまのをしけくもなし

○此詞みな時といふことゝ聞ゆるよし太平いへり今も肥後にて行しな帰しなどいふしなは此思太の転じたるなり。

とある。してみれば、広足の「しだ（時）」説は本居大平に啓発されたものかもしれないが、「越えシダ」の説は多分広足自からのものであろう。

広足が雅言集覧に増補を行ったのは、恐らく「雅言類聚」などをもとに嘉永・安政の交に逐次、補っていったものであろうから、かの「詞の八衢補遺」や「玉霰窓の小篠」などの著書の完成と相まって、それらの副産物としてできたものであろう。ともあれここまでくればも早説明は不用である。明治三十一年刊（明治十七年成稿）の「言海」は早速「しだ（時）」の語を掲げて、

時ノ意ニテ、今行キしな帰りしな起キしなナドイフしなコレナリト云。「トホシトフコナノ白嶺ニ逢思太モ、逢ノヘ思太モ、汝ニコソ寄サレ」ヒナグモリ碓氷ノ坂ヲ越エ志太ニ、妹ガ恋シク、忘ラエヌカモ」

とあり、この系統に属する大言海はもとより大日本国語辞典にこの用例がそのまゝ踏用されたのは自然であろう。恐らく折口博士の口訳の解釈もこのような語例からの影響であったかもしれないが、この説が後の万葉解釈に殆どとり入れられなかった点だけに口訳万葉集の意義もあるというべきであろう。

註

（1）福田教授は拙考を原始国語における連用形の連体的機能の一つとされて「匂えをとめ、栄えをとめ」（十三・三三〇九）の例と揆を一にするものと見られた。（古典解釈と文法・一万葉集の問題点）

（2）中島広足書入万葉集（万葉書誌学二五〇ページ）という本が在るが、未詳である。

四

補説は一往終ったが、すこしつけ加えさせて頂くならば、この書き入れ校合本万葉集の巻末に父の付箋が入っていて墨書で

万葉集十六巻

一、二、十一、十二、四巻缺

長崎　青木永章　校合本

此本昭和十九年M書店ヨリ借受ケ忘却シテ同三十一年九月架中ニ見出シ価ヲ払ヒテ家蔵トスルモノ也　㊞

とある。終戦前本屋から借覧して十二年間そのまま書架の中にねかしてあったのを、やっと気付いて代金を払ったというのであるから、お互に呑気な話であるが、売買の間の気持もよくわかると思う。

ともあれ「碓氷の坂」については、父にもまた懐しく思い出があった。直接聞いたことであるが、彼は東京高師受験の際、始めてここを通って上京したのである。当時は郷里の方へは甲武鉄道（今の中央線）は延びておらず、また前任の小学校は小諸の南郊であったから、東京へ出るにはすべて信越線によったのである。小諸の駅頭から教え児たち――校長兼訓導で他に同僚の先生はいなかったという――に見送られて、それこそ笈を負うて花の都へ出発していったのであった。浅間の煙を左に、最近廃線になったが、開通後間もないアプト式鉄路を煤烟になやまされながら――当時電化はしておらず、鉄道の難所であり事故も多かったという――関東へ下っていったのであった。

履歴をご覧いただけばわかるように、父はその生涯において、旧制新制をとりまぜて、あらゆる種類の教壇に立っているのであって、それが一つの自慢でもあった。晩年はそれらの学校の一つ一つを遍歴しようという志をたてていた。然し上京や帰郷の機会はあっても、寄る年浪と共に実行が次第に臆劫になり、とうとう碓氷の坂を西に越えて、再び思い出の佐久の地に足を運ぶことはなかったのであった。

――一九六三・三・三――

後　記（御挨拶）

亡父春日政治の生前没後皆様からお寄せ頂きましたご好誼とご厚情には遺族の一人として感謝にたえません。とりわけ、わたくし共は父を通して常に皆様からの限りなく温いご芳志に浴してまいりましたので、有難さがひとしお身に染みて感じられます。ここに本誌上を拝借いたしまして、謹んで御礼を申し上げます。

昭和三十八年四月一日、遺愛の馬酔木咲く故人誕生の日

春　日　和　男